

「買える」図書館定番グッズを作る：九州大学附属 図書館における商品開発記録

梶原, 瑠衣
九州大学附属図書館図書館企画課企画係

山根, 泰志
九州大学附属図書館eリソース課

<https://hdl.handle.net/2324/7169360>

出版情報：Journal of College and University Libraries. 125, pp.2166-, 2024-03-31. Japanese
Coordinating Committee for University Libraries

バージョン：

権利関係：Creative Commons Attribution-NonCommercial International



「買える」図書館定番グッズを作る —九州大学附属図書館における商品開発記録—

Producing “Buyable” Standard Library Goods:
Record of Product Development in Kyushu University Library

梶原 瑠衣¹, 山根 泰志²
Rui KAJIWARA¹, Yasushi YAMANE²

抄録：九州大学附属図書館は、貴重書等の画像を活用した図書館グッズを、九州大学生協同組合と共同制作した。当該商品は、九州大学のオリジナルグッズのひとつとして、2021年に販売が開始され、恒常的に誰でも購入できる状態となっている。また、寄附事業「九州大学デジタル資料整備事業」の返礼品としても活用している。従来、九州大学附属図書館では無償の図書館グッズを制作したことはあったが、販売用グッズ制作は初めての試みとなった。1年以上かけて制作した図書館グッズについて、完成までの道のりを紹介する。

キーワード：九州大学附属図書館、貴重書画像、図書館グッズ、寄附事業、九州大学基金、九州大学デジタル資料整備事業

1. はじめに

九州大学附属図書館（以下、「当館」という）が蒐集してきたコレクションには、世界的に珍しい貴重書や、九州・福岡ならではのユニークな資料が多数含まれている。そのような資料の画像を活用した附属図書館オリジナルグッズ（以下、「図書館グッズ」という）が、2021年、九州大学生協同組合（以下、「九大生協」という）において販売開始された。本稿では、当館において初の試みとなった販売用グッズ制作について、経緯と過程を紹介するとともに、取り組みの意義を省察する。

2. 制作の経緯

2.1 グッズ前史

図書館グッズ制作の経緯を振り返るに先立ち、当館で制作してきた無償のグッズについて触れておきたい。

当館では従来、必要に応じてグッズを制作してきた。例えば、展示会出品資料の絵葉書、学習相談デスク広報用のクリアフォルダ、新図書館グランドオープン記念のロゴ入りグッズ（USBメモリ・不織布バッグ・クリアフォルダ）などが挙げられる。これらはどれも、特定の担当課・係やワーキンググループが中心となって作成した、一時的な無償配布のものだった。そのため、いつでもどこでも入手できる、当館全体を代表するようなグッズは、長い

間存在していなかった。

2.2 広報戦略の見直し

図書館グッズ制作のきっかけとなったのは、当館における広報戦略の見直しだった。2019年1月から3月にかけて、広報誌見直しに端を発して、広報戦略全体を見直すための「広報戦略検討チーム」が設置された¹⁾。このチームの提案を受け、同年4月、当館の図書館広報室にて「広報戦略チーム」が活動を開始した。

図書館広報室とは、当館における広報活動全般に関することに取り組む場として設置されているものである。ここでは、室長の下、毎年10名程度の各館課等の職員が室員として充てられ活動している。図書館広報室には、広報に関する特定の課題に対応するため、必要に応じてチームを置くことができる。「広報戦略チーム」は、この枠組みの中で、広報活動計画について集中的に議論を行うことを目的として設置された。

広報戦略チームにおいて半年ほど議論を重ねた結果、2019年12月頃には、百年以上にわたり蒐集されてきた各学問分野の蔵書こそが当館のブランドの大きな特徴であるという位置づけがなされた。そして、貴重書等の画像を利用して、当館のブランディングとレピュテーション向上に取り組むことが館内に共有された。

この流れの中で、当館に定番グッズがないことが問題として挙がった。2019年当時は、九州大学（以下、「本学」という）の伊都キャンパス移転事業完了からまだ間もなく、2018年10月にグランドオープンした新しい中央図書館に、多数の訪問客・見学者が訪れていた。外部から本学へ訪れた方々が所属先へ持ち帰ることで当館の魅力が周囲に広げられるような、土産品の必要性が高まっていた。

2.3 寄附事業

前述のような状況の中で、2018年に開始した当館における寄附事業の存在も、図書館グッズ制作のきっかけのひとつとなった。

本学では、2011年に九州大学基金を創設し、大学への寄附を募っている。当館では、九州大学基金のプロジェクトのひとつとして、2018年4月に九州大学附属図書館中央図書館整備事業²⁾（以下、「中央図書館整備事業」という）を開始した。これは、中央図書館の学習研究環境の整備・充実等をはかるためのもので、2021年3月まで継続した。同年4月からは、新たなプロジェクトとして、九州大学デジタル資料整備事業³⁾（以下、「デジタル資料整備事業」という）を開始し、電子コンテンツの整備・充実や、貴重書等のデジタル公開促進に取り組んでいる。

寄附事業の謝意について、中央図書館整備事業では、一定額以上の寄附に対し、中央図書館書架への銘板の設置・顕彰を行っていた。しかし、これ以外に返礼品等は準備しておらず、寄附の呼び水が不足していた印象があった。デジタル資料整備事業はその反省を生かし、計画段階から謝意の充実を検討していた。

最終的には、図書館グッズがデジタル資料整備事業の返礼品として設定されることになるのだが、そこに至るまでの過程を、次項から順を追って説明していきたい。

3. 制作の過程

3.1 目標地点の設定

ここまで述べたように、直線的な流れではなかったのだが、グッズの必要性についての意識が、当館の職員間で共有されていった。その流れを受け、図書館グッズ制作企画が、2019年12月頃に、広報戦略チームメンバーを中心として開始された。

企画当初に想定したグッズの水準は、土産品となると同時に寄附事業の返礼品にもなりうるもの、というところに目標を置いた。そのためには、従来のような無償グッズではなく、美術館、博物館等で販売されているような有償の商品にしたいと考えた。

全国の大学においては、大学生協同組合でオリジナルグッズを制作し、売店や通販で広く販売している事例が多く見られる。本学でも、九大生協が各種九州大学オリジナルグッズを制作・販売している。ただ、当館の貴重書画像等がグッズの素材として利用されたことはこれまでなかった。

本学オリジナルグッズとしての図書館グッズ制作が実現すれば、大学のブランド向上に図書館が寄与できる。加えて、図書館内で完結しがちな従来の広報活動をより開かれたものにできるだろうとも考え、「九大生協との共同開発」という形でのグッズ制作を行うために動き始めた。何をどうすれば、図書館グッズを九大生協の店頭に並べることができるのか、手探りだった状態から実現するまでの道のりを、時系列に沿って紹介していきたい。なお、文中にある学内他部署の名称はグッズ制作当時のものであり、現在は組織改組によって変更されている。

3.2 関係部署へのコンタクト

本学オリジナルグッズ販売促進等の学内担当課であった総務部地域連携課へ問い合わせを行ったところ、協力的な反応が得られ、すぐに地域連携課、九大生協、当館職員での打ち合わせが設定された。

打ち合わせでは、九大生協と地域連携課から、本学オリジナルグッズ制作・販売についての概要説明があった。その後、三者で意見交換を行う中で、制作したグッズは寄附事業の謝意としての活用も想定していることを、当館から九大生協へ伝えた。

打ち合わせ後、次の段階として、まずは当館が、制作したいグッズの種類及びグッズに使用する貴重書等の画像素材を九大生協に提案することになった。また、寄附事業の謝意とする場合は、九大生協の商品として制作した図書館グッズを当館が買い取る形になるため、その予定数を計上することになった。これらの情報をもとに、九大生協で制作コスト等を検討し、当館が希望する図書館グッズが実現可能かどうか、判断されることになった。

3.3 グッズの種類・素材検討

図書館広報室では、前項の打ち合わせ以前から、他機関のグッズ情報や、当館でグッズに活用できそうな素材を収集していた。九大生協への提案内容を検討するにあたり、既に蓄積していた情報を、商品にするという観点で整理した。最初の提案として、グッズの種類を4つに絞り、それぞれに適した複数の素材例をまとめた。

当然のことながら、最終的にはこの提案内容がほぼそのまま実現したのもあれば、変更・却下と

なったものもある。検討過程の記録として、この段階での提案商品を紹介する。

提案商品1：手拭い

古地図・名所図会を図版として利用することを想定した。素材例として、『都府楼図巻』、『筑前名所図会』松囃子の図・怨霊出現図を挙げた。

古地図・名所図会は一般人にも親しみやすく、他機関でもグッズの素材として定番である（例：大阪府立大学オリジナルグッズ「注染の府大手ぬぐい」⁴⁾）。素材例として挙げた資料はサイズが大きいものが多く、小さい形態のグッズでは素材として活かすににくいと思われた。その点、手拭いであれば大きく印刷することが可能であると考えた。

提案商品2：缶バッジ・マグネット

キャラクター的な図案を利用することを想定した。素材例として、『詩法』唐少村肖形印、『五臓之守護并虫之図』、『うつほ物語絵巻』、『随神屋集古図説』、『蒙古襲来絵詞』てつはうを挙げた。

他機関では、所蔵資料に掲載された特徴的な人・生物・モノをキャラクターとして捉え、グッズに活用する例がある（例：大阪市立図書館「ちゃりんこ兄弟」グッズ⁵⁾）。缶バッジ・マグネットはそのサイズ感から、キャラクターをトリミングした図案を活かしやすと考えた。

提案商品3：メモ帳

マウスパッドとしての機能を併せ持つメモ帳を作成したいと考えた。素材例として、『福岡城下町・博多・近隣古図』を挙げた。他機関での事例を参考とし（例：九州国立博物館「マウスパッドメモ」⁶⁾）、古地図を活用するグッズの一つとして提案した。

提案商品4：鉛筆

軸の部分に活字等をデザイン的に印刷したものを想定した。素材例として、トマス・アクィナス『自由（任意）討論集』を挙げた。

他機関の事例として、ゲーテンベルグ聖書の活字を活用した鉛筆があった⁶⁾。これを参考に、当館所蔵のインキュナブラの活字をデザインとして活かすことを考えた。

3.4 デザイン案第一弾

当館の提案内容をもとに、九大生協の提携業者が各商品のデザイン案第一弾を作成した。提案商品3のメモ帳は、業者側が参考すべき先行商品を手に入できなかったことからデザイン案に含まれず、この時

点で制作を見送ることとなった。一方、九大生協から、クリアフォルダを制作してはどうかという新たな提案もあった。クリアフォルダは安価でセット売りがしやすく、オープンキャンパスで来学する高校生にも購入しやすい。デザイン案は他の商品とともにすでに準備されていた。

この時提示されたデザイン案一式の内容は、図書館広報室で検討し、希望する商品の種類とそれに適した素材を見直すことになった。

ここでやや話は逸れるのだが、デザイン案第一弾が完成したのは、新型コロナウイルスで社会が混乱に陥っていた2020年4月で、この時期、図書館広報室員が対面で議論することはできなかった。しかし、デザイン案の見直し作業自体はそれほど滞らなかった。当館では、図書館業務の改善を目的として、2019年3月よりプロジェクト管理ツール「Backlog」を導入⁷⁾していた。2020年4月当時は、多くの職員が在宅勤務を行っていたが、Backlogのおかげで比較的スムーズに議論を進めることができた。



図1 Backlogの課題画面

図書館広報室での調整の結果、制作したいグッズの種類・素材について、当館の方針案を次のようにまとめ、再提案書を作成した。

- ・手拭い 3種類
- ・クリアフォルダ 5種類
- ・缶バッジ 3種類
- ・マグネット 3種類
- ・鉛筆 1種類

3.5 学内の調整

デザイン案第一弾に対する当館からの再提案内容がまとまったところで、本学の広報室（以下、図書館広報室との混同を避けるため、「九大広報室」という）へ、大学全体の広報活動という枠組みの中で

必要な手続きを問い合わせた。

九大広報室からはすぐに回答が届いた。まずは、その時点で準備できていたデザイン案について、学内広報アドバイザー教員へ相談を行い、その後、学内の広報戦略を審議するための場である広報戦略推進室会議へ附議するという流れとなることが整理された。

学内広報アドバイザー教員への相談は、2020年6月に行われた。前述したように新型コロナウイルスへの対策が求められた時期だったため、オンライン会議での相談となった。教員からは、商品への本学ロゴの入れ方や、統一感のあるデザインを考慮することなどについて助言があった。この内容を反映したうえで九大生協へ再提案書を送り、デザイン案第二弾を待つことになった。

3.6 デザイン案第二弾

デザイン案第二弾では、手拭い、クリアフォルダ、鉛筆が、後述の完成品に近い状態となって提案された。しかし、残りの缶バッジとマグネットについては、デザイン・素材がなかなか固まらず、他の商品と足並みが揃わなかった。広報戦略推進室会議が迫りつつあったため、缶バッジとマグネットはこの時点で制作を見送ることにした。

3.7 学内会議での承認

2020年8月から9月にかけて行われた広報戦略推進室会議では、教員から様々な意見をもらうことになった。特に具体的な改善点に繋がった意見として、「グッズと本学の関係が分からないため、買いにくい、使いにくい、他の人に渡しにくい」「グッズが一人歩きしたときに九大図書館の所蔵貴重資料であることがわからない。なぜ貴重かもわからない」などがあった。

図書館職員としては、当館所蔵資料をモチーフとしている、という点において、本学とグッズの繋がりは自明である。しかしそれは、資料を身近に毎日を通しているからこそその感覚だろう。確かに、古そうな本のページや地図の画像があらわれたグッズは、一見しただけでは本学と何の繋がりがあるのかわからない。教員の意見はもっともだった。

教員からは、意見だけではなく、その具体的な解決策も同時に提示された。例えば、商品に日英併記の短い説明文を添付する、URLを付けて説明用ウェブページへ誘導する、などである。会議後には、九大生協と再度検討を行い、実際に、和英併記した関連ページへのQRコード入りの説明書を商品に添付することになった。



図2 商品に添付する説明書案（日本語）



図3 商品に添付する説明書案（英語）

他にも、商品自体にも資料名や所蔵機関名等を入れたほうがよいという意見もあり、デザイン上支障がないものは対応した。さらに、本学の博物館や文書館等と連携し、統一的なグッズシリーズ名を考案したうえでブランド化をはかったほうがよい、という、今後の課題として捉えられる意見もあった。

3.8 完成品概要

2020年12月の広報戦略推進室会議での正式承認後、2021年1月から2月にかけて最終的なデザイン調整を行った。そして、同年3月、下記の図書館グッズが完成し、販売が始まった。完成したグッズの種類と素材、素材の選定理由を次に紹介する。

(1) クリアフォルダ6種

・素材A：『随神屋集古図説』（中央図書館所蔵）

『随神屋集古図説』は、明治時代の福岡を代表する国学者江藤正澄（1836-1911）が、蒐集した考古資料等を自ら図示し、来歴や使用法等の説明を加えたもの。写真技術が普及していなかった考古学黎明期の雰囲気や歴史・考古ファンを惹きつけること、糸島周辺から出土した考古資料もあり、地域

の方々の関心を呼びやすいこと、日本文化の要素が詰まっており、海外向けのお土産としても適していること等から素材として選定された。



図4 『随神屋集古図説』 クリアフォルダ

・素材B：『福岡城下町・博多・近隣古図』（記録資料館三奈木黒田家文書所蔵）

『福岡城下町・博多・近隣古図』は、福岡藩家老三奈木黒田家に伝わったもので、1800年頃の城下町福岡と商人の町博多の様子が窺える大型の地図(223.2×266.5cm)。当時の町割りや侍屋敷の居住者、土地の由来など、数々の重要な情報が記載されている。この資料は、高精細なデジタル化により、細部まで読みとることが可能となっている。その解像度の高さが感じられるように、クリアフォルダ裏面には現在の天神地区の拡大図を掲載した。

福岡を代表する古地図であり、地図好きや歴史ファンを惹きつけること、200年前と現在の福岡を比較する楽しさもあり、お土産として適していること等から素材として選定された。



図5 『福岡城下町・博多・近隣古図』 クリアフォルダ

・素材C：『詩法』（中央図書館樋口文庫所蔵）

『詩法』は16世紀明代の詩学書で、樋口文庫本は世界で唯一欠落がない稀覯本。クリアフォルダ裏面にあしらった印は、この資料に押されているものである。笠を頭に載せた人物が書物を指さしている図案は、明時代の書店の店主（唐少村）が、この書物がいかに素晴らしい本であるか、自ら売り込んでいく姿を印にした広告の一種。中国では漢籍が珍重され喜ばれるため、海外向けのお土産としても適していること、唐少村の絵図には独特のユーモアがあること、旧蔵者の樋口和堂（1835-1898）は、筑後八女を代表する漢学者で、奥八女芸農プロジェクトなど、本学と関係が深い八女地域の方々の関心を呼びやすいこと等から、素材として選定された。

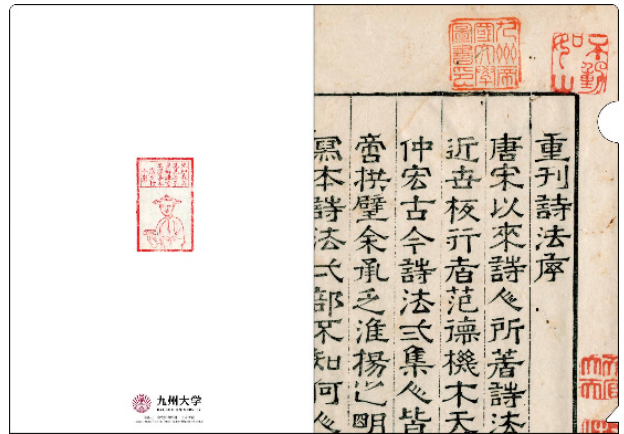


図6 『詩法』 クリアフォルダ

・素材D：『うつほ物語絵巻』（中央図書館細川文庫所蔵）

『うつほ物語』は『源氏物語』以前に成立した長編物語。クリアフォルダに掲載した絵図は、「主人公清原俊蔭の娘とその子仲忠の2人が「うつほ」（洞穴）の前で琴を演奏し、音色に感じ入った動物達が木の実を携えてやって来る場面」⁸⁾を描いたものである。絵の質が高く、日本の古典・文学・美術に関心のある方々を惹きつけること、日本文化を紹介するものとして海外向けのお土産としても適していること、宇土細川家という熊本の名家に伝わった絵巻であり、福岡と地理的に近い場所と縁があるものであること等から素材として選定された。



図7 『うつほ物語絵巻』 クリアフォルダ

- ・素材 E：『赤道南北恒星図』（中央図書館桑木文庫所蔵）

『赤道南北恒星図』は江戸時代に作成された大型の星図（80×78cm）。西洋天文学の影響を受けて恒星の等級の記述があり、天文学史上貴重な資料である。天文ファンを惹きつけること、本学理学部の基礎を築いた桑木或雄ゆかりの稀観書であり、理学部の教職員・学生、卒業生の関心呼びやすいこと、星図はデザインとして活かしやすいこと等から素材として選定された。

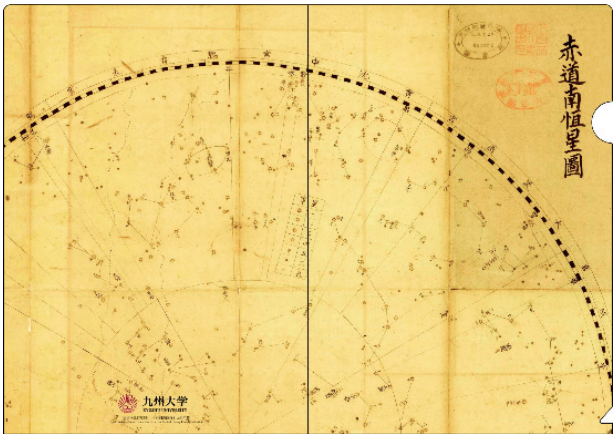


図8 『赤道南北恒星図』 クリアフォルダ

- ・素材 F：九州大学ゆかりの蔵書印

当館所蔵の図書に押印された蔵書印をちりばめたもの。本学の新旧様々なキャンパスゆかりの蔵書印を集めているため、本学出身者の関心呼びやすいこと、本学の歴史を象徴する素材であり、他機関へのお土産として適していること等から素材として選定された。

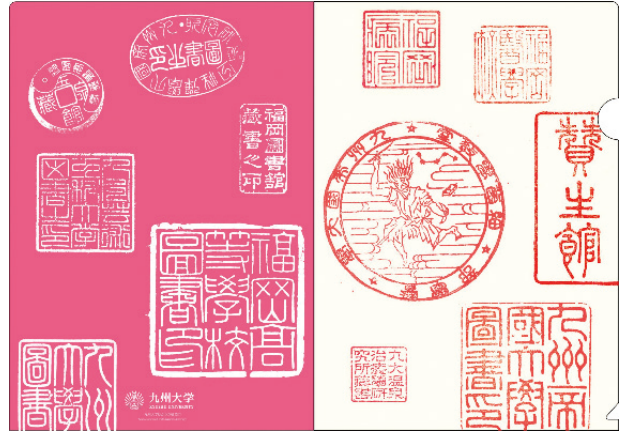


図9 九州大学ゆかりの蔵書印クリアフォルダ

- (2) 鉛筆1種

- ・素材 A：『自由討論集』（中央図書館所蔵）

『自由討論集』（*Quaestiones Quodlibetales*）とは、「文字通り、誰でも、どんな問題についても質問してよい討論のことであり、ヨーロッパにおける中世の大学では復活祭の前とクリスマスの前に行われるのが例であった⁹⁾という。「開かれた」大学のあり方を象徴するものであることから、大学のグッズとしてふさわしく、本学入学を目指す受験生、オープンキャンパス来学者へのお土産に適していること、本学を代表するインキュナブラであり、西洋古典・哲学に関心のある方々を惹きつけること、インキュナブラ独特の文字がデザインとして利用しやすいこと等から素材として選定された。

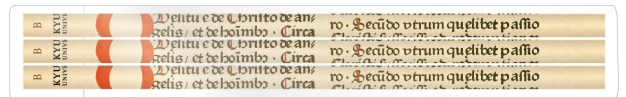


図10 『自由討論集』 鉛筆

- (3) 手拭い2種

- ・素材 A：『都府楼図巻』（中央図書館所蔵）

『都府楼図巻』は、古代大宰府の情景を想像して描いた絵巻物。福岡を代表する観光地である太宰府地方を描いた作品として、福岡に縁のあるモチーフである。中国式建築も描かれるなど、東洋的情緒に溢れており、海外向けのお土産としても適している。新元号「令和」の典拠とされる『万葉集]「梅花の歌三十二首 序文」の歌が詠まれた頃の大宰府政庁や、「鬼滅の刃」の聖地として注目される竈門山が描かれているなど、話題になり得る要素が多いこと、筆者の蓑虫山人（1836-1900）は放浪の絵師として知られ、近年評伝の刊行などにより注目されていること、本学には長年にわたる大宰府研究の蓄積があること等から素材として選定された。

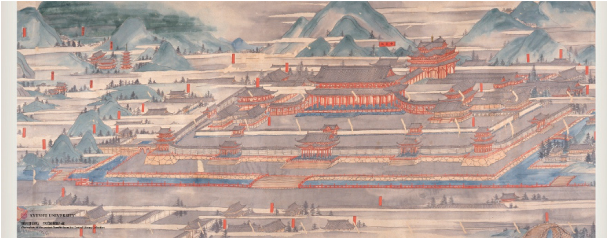


図11 『都府楼図巻』 手拭い

・素材B：『筑前名所図会』 松囃子の図（中央図書館廣瀬文庫所蔵）

『筑前名所図会』は、博多の町人奥村玉蘭（1761-1828）によって著された福岡の観光ガイドブックで、福岡藩内の景観や風俗、伝説等を挿絵によって解説したもの。松囃子は福岡を代表するイベントで、例年本学も参加している博多どんたくの起源とされている。福岡という土地と本学の繋がりが感じられること、江戸時代の日本の風俗をユーモアたっぷりに描いており、海外向けのお土産としても適していること等から素材として選定された。



図12 『筑前名所図会』 松囃子の図 手拭い

以上のように、素材については、福岡の地域性が感じられる、海外向けのお土産としても適している、本学との繋がりがわかりやすい等の点を重視し、具体的なターゲットを想定して選ばれた。

良い素材でありながら、結果的に採用されなかった資料として、『五臓之守護并虫之図』（医学図書館眼科教室旧蔵狩野本所蔵）がある。寄生虫や寄生虫が原因となって起こる病気の研究が進歩する以前から、しばしば想像上の虫が病気の原因ととらえられてきた。本書はそうした想像上の虫をユーモラスに描いたもので、クリアフォルダの素材候補となっていた。そのデザイン案は、学内広報アドバイザー教員からも素材として高く評価されたが、近隣の九州国立博物館が類本である『針聞書』によりグッズ展開しており、差別化が難しいこと、虫損により画像をそのまま使うことができないために図案化には工夫が必要なこと等から、残念ながら採用を見送ることとなった。素材として面白いものだけに高いセンスを求められ、逆にグッズ化しにくくなるという事

例であり、素材を最大限活かすことの難しさを痛感させられた。



図13 『五臓之守護并虫之図』

4. 販売

4.1 販売方法

図書館グッズは、当初、本学全キャンパスの九大生協店舗で販売されることが検討されていた。しかし、コロナ禍による影響もあり、2023年12月現在、伊都キャンパス3店舗と病院キャンパス1店舗での販売に止まっている。また、九大生協のウェブサイトに大学オリジナルグッズの通販案内ページがあるが、サーバ移行中によりカタログが更新されておらず、図書館グッズは掲載されていない（通販自体は可能）。

4.2 図書館での広報

当館のウェブサイトに図書館グッズ紹介ページを作成している¹⁰。当該ページでは、商品の種類・価格等の紹介だけでなく、モチーフとして使用した図書館資料の解説も掲載している。デジタル資料整備事業へのリンクも設け、寄附事業のアピールにも繋げている。



図14 図書館グッズ紹介ページ

4.3 売上概要

図書館グッズの売上数については、九大生協からデータ提供を受け、当館でも把握している。内容は、販売開始1年目の2021年度と2年目の2022年度の各商品の売上内訳が分かるものである。ここで具体的な数を公表するのは控えるが、大まかな印象としては、1年目は予想通りの妥当な売上数（有体にいえば、それほど数は出ていない）、2年目は予想を上回る売上数となっていた。

売上数の変化は、外的要因が大きいと推測される。2021年度は本学キャンパスにおける各種対面イベントがまだ全面的には実施されていなかったが、2022年度は少しずつ再開されるようになってきた。販売を始めて3年目となる2023年度現在は、コロナ前とほぼ同様の規模で対面イベントが実施されているため、更に変化が見られるだろう¹¹⁾。

なお、当初の予定通り、デジタル資料整備事業の返礼品として使用するために、当館予算で商品を一定数買い上げた。一定額以上の寄附者には、本学規程に基づいた手続きを行ったうえで譲渡している。



図15 デジタル資料整備事業案内ページ³⁾

5. まとめ

最後に、ここまで述べた内容を年表の形にして以下に示す。

年	月	事項
2018	4	中央図書館整備事業開始
	10	中央図書館グランドオープン
2019	1	広報戦略検討チーム設置
	2	
	3	広報戦略検討チーム活動終了
	4	図書館広報室に広報戦略チーム設置
	5	↓ 広報活動計画を議論 ↓
	6	
	7	
	8	
	9	
	10	
	11	
	12	図書館グッズ制作企画開始
2020	1	九大生協・地域連携課との打ち合わせ
	2	
	3	
	4	デザイン案第1弾
2021	5	↓ デザイン等調整 ↓
	6	
	7	
	8	
	9	↓ 広報戦略推進室会議にて正式承認 ↓
	10	
	11	
	12	
2021	1	最終調整
	2	
	3	図書館グッズ完成・販売開始
	4	中央図書館整備事業終了
2021	4	デジタル資料整備事業開始

図16 図書館グッズ関係年表

図書館グッズの制作企画開始は2019年12月頃だった。販売開始は2021年3月であるから、企画から実現までに、1年以上かかったことになる。振り返ってみると、グッズのデザインや素材の検討よりも、関連部署との調整、学内会議での承認手続きにかけた時間の方が長かったようにも感じられる。ただ、事務手続きに時間を割いたことを否定的に捉えてはいない。今後、外に繋がる広報活動を進める際の経験値を積めたことは、収穫のひとつだと考えられる。

今回、図書館の独自制作ではなく、大学で合意をとり、九州大学オリジナルグッズとして制作したことで、図書館グッズは九大生協で恒常的に購入可能となった。意外性のあるデザイン・商品ではなく、SNS等で話題になっている様子もないため、購入者の反応はあまり聞こえてこない。しかし、広報は単発のインパクトある活動とともに、細く長い活動も大切である。今回の事例は後者にあたるだろう。

必要な時に、求める人の手に届くグッズ。図書館の書架に並ぶ資料たちとどこか似ている。

注・引用文献

- 1) 斎藤未夏ほか. 九州大学附属図書館における新たな広報戦略の検討. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2019, 2018/2019, p. 8-13.
<https://hdl.handle.net/2324/2327996>, (参照 2023-12-06).
- 2) 九州大学附属図書館. “九州大学附属図書館中央図書館整備事業 [2018.4-2021.3]”. <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/kikin/overview>, (参照 2023-12-06).
- 3) 九州大学附属図書館. “九州大学デジタル資料整備事業”. <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/kikin>, (参照 2023-12-06).
- 4) 大阪府立大学 Facebook. “【注染の府大手ぬぐい 新デザイン発売！！】”. <https://ja-jp.facebook.com/OsakaPrefectureUniv/posts/1225342464285407/>, (参照 2023-12-06).
- 5) 大阪市立図書館. “ちゃりんこ兄弟グッズが登場”. <https://www.oml.city.osaka.lg.jp/index.php?key=joltou3n5-9509>, (参照 2023-12-06).
- 6) 2023年12月現在, Web上に商品情報は残っていない。
- 7) 林豊ほか. 九州大学附属図書館におけるプロジェクト管理ツールの導入. 九州大学附属図書館研究開発室年報. 2019, 2018/2019, p. 14-20.
<https://hdl.handle.net/2324/2327997>, (参照 2023-12-06).
- 8) 田村隆. “細川文庫”. 九州大学百年の宝物. 九州大学百年の宝物刊行委員会. 丸善プラネット, 2011, p. 122-123.
<https://hdl.handle.net/2324/1526202>, (参照 2023-12-06).
- 9) 稲垣良典. “トマス・アクィナス研究コレクション”. 九州大学百年の宝物. 九州大学百年の宝物刊行委員会. 丸善プラネット, 2011, p. 84-85.
<https://hdl.handle.net/2324/1526202>, (参照 2023-12-06).
- 10) 九州大学附属図書館. “九州大学附属図書館オリジナルグッズ”. <https://www.lib.kyushu-u.ac.jp/ja/goods>, (参照 2023-12-06).
- 11) 筆者は2023年11月に行われた本学の大学祭「九大祭」の日に九大生協店舗へ立ち寄る機会があったのだが、短い滞在時間の間に、複数の客が図書館グッズを手にしてレジへ向かう姿を目にした。

参考文献

- 1) 横山美佳. パブリック・リレーションズとしての図書館グッズ販売. 東北大学附属図書館調査研究室年報. 2017, 4, p. 119-123.

<https://tohoku.repo.nii.ac.jp/records/106990>, (参照 2023-12-06).

- 2) 渡辺由利子. ライブラリー・グッズの可能性－ミュージアム, 米・英の国立図書館の事例を通して. カレントアウェアネス. 2011, 307, p. 23-28.
<https://current.ndl.go.jp/cal742>, (参照 2023-12-06).

<2024.2.8 受理>

- 1 かじわら るい 九州大学附属図書館図書館企画課 企画係
- 2 やまね やすし 九州大学附属図書館eリソース課